

江戸前期瀬戸内東部の湊について

中川すがね

はじめに

瀬戸内海は古代から都と九州、ひいては大陸をつなぐ大動脈であった。中世には多くの湊が確認でき、各地の船が兵庫北関に入港していたことは有名である。

江戸前期、十七世紀後半に西廻航路が開発されると、瀬戸内は西国だけでなく、北国と上方を結びつける海域になった。江戸前期には大小の船を有した湊も多く、後期には地元の大廻船は減少するが、北前船や尾張廻船など地方廻船がこの海域での商事に参入してくる一方で、中・小型の渡海船の活躍は長く続いた^①。

しかし江戸時代の瀬戸内諸湊の全般的状況や相互関係、湊の変化に關しては、よくわかっていない。瀬戸内西部には長州藩や広島藩といった大藩があり、まとまった史料もあることから、伝統的な地乗りから沖合を一気に帆走する伊予路沖乗りへと航路が変わり、島嶼部に安芸の御手洗などの新しい湊が生成したこと、十九世紀前半には安芸・伊予・周防・豊後が密接な関係にあつて日常の生活物資を取引する生活圏が形成

され、それが遠隔地交易と結びついて人々の活動を活性化させていたことなどがわかってきている^②。

江戸時代における瀬戸内沿岸の変化を大坂との関係でとらえたいというのが私の希望であるが、本論ではその前提として江戸前期の瀬戸内東部の湊の状況を知るため、寛文七年(一六六七)の幕府海辺巡見の記録を整理した。どこにどのような湊が存在していたのかという基礎的な確認作業である。

なお瀬戸内海の範囲は法令などにより差違があるが、概ね本州・四国及び九州によって囲まれる内海をさす。七〇〇を超える島々があり、地球の半径とほぼ同等の長い海岸線を有し、浦も非常に多い。多くの瀬戸や灘といった海域から成っていて、それぞれ性格の違いがある。そのため本論では、瀬戸内東部の大阪湾、播磨灘、備讃瀬戸の海域の浦々を取り上げて検討することとする。図1に、「瀬戸内海環境保全特別措置法」による瀬戸内海の範囲と、地域区分を示した。ただし地域区分は漠然としたもので、本論では史料上の制約もあつて、便宜的な区分けをしている。

一 海辺巡見使とその記録について

①海辺巡見使派遣の経緯と意図

江戸幕府の巡見使の制度的発端は、三代将軍家光の時代の寛永十年(一六三三)に帰されることが多い。この時の巡見使は、六筋にわけて派遣され、「道筋境目」の見分を名目とし、各地で国絵図を徴収した。その後寛永十五年に国絵図の再徴収を行い、これは「日本六十余州図」